「やしゃぶ箱歌（2004～2012）」

「[illegible]（2004～2012）」

「装丁の中」

古い外国の話、題名も訳せなかった本
装丁が綺麗で守ってた、雨の奥

僕の傍でしゃがみ込んだ
それは帰り道決められなかった君
向かい合う水たまりの鏡、指先二本つけた
雲と人の波間、銀色に瞬いて見えたの

僕へ呟いたらしい君の、指のバレエ
三日月がアスファルトに解け出すまで
君の隠す傘の上から見下ろしてた

濡れた僕の髪と君の左膝

その隙間に、お話を詰めたくなった
独りきりの僕、君が留守の君
そんな二人が連れ合う日々、綴じる装丁、君はどんなだと思う

ベランダに寄り添う靴二足、お邪魔する小雨
服を着た君が、過去を見上げる
一人、ベッドに残された僕の奥では
インクが一滴、また心に溜まる

「過去の雨音に耳を抑えないのは
あなたの寝惚け顔が見えるからよ」
と君は僕の涙を拭き取った

君模様で僕細工の本の装丁
その中身はまだ初雪のようにまっさら
手を引くから、踏み出してごらんよ

二人の吐息に合わせて、色づく世界の姿、僕らどこで踊ろうか

拭き捨ててきた涙は雲に昇り、雨脚にのって哀しさ呼び戻す
拭かなかった涙は心に落ちて、錆びた寂しさ、目から淡い光を漏らす
それを月の色と言ってくれた君のいる、雨模様の優しさに
二人の明日、綺麗な装丁に、綴じたくなった

希望の模様も紡ぐ、過去の細工
白紙の明日、虹になって、陸も海も渡してくれる
語り明かそうよ、七色の冒険談
膝枕の座席から、僕らの物語、君はどう描いてくれる

雨模様で銀細工、二人の装丁
中に綴じられたお話はこれからも、真っ白のまま
僕の右手と君の左手で、閉じたまま歩いてこう
読み終わった本が本棚に帰るように

二人の組み合わせが、過去のものにならないと、僕は一人、信じてる

「打倒！　怪人ゲンジツー」

まだマフラーも一人で巻けなかった僕
その君が生きていた世界
今の私は、その世界に生きているのかな
まだ見えないのかも知れない
だって君が思うより世界はややこしいんだ
敵の姿はよく見えないし
仲間を助けるのは三十分なんかじゃ足りない
悪の怪物なんてどうやら存在しなくて
大人には面倒な手続きが多いんだ

でも心配しないで
私は君が目を輝かせるような男になってみせるよ

そうだ、分かりやすく空を舞って現われよう
あの黒い雲を裂くように
君と僕が大好きな、あのヒーローのように
少し時間が必要かもしれないけど
大丈夫、会える
だって
僕は知恵を身につけた
あとは
君と私の笑顔が、僕らを繋いでくれるから

「憧れのふらんす」

ハァイ　ボンジュール！
ハァイ　ボンジュール！
何だよ
フランス人は
ボンジュールが
超茶飯事じゃないのかよ
何困った顔してんだ

ハァイ！
ボンジュール・・・

何だよ
声がちっちゃくてきこえねえよ

ナンダヨ

ナンダヨなんだよ
そのオーノーのジェスチャーは

分かった
死にたいんだな
よし、そこに直れ
指導してやる

なんだ、お辞儀ができるのか
日本の心じゃないか
よし
武士の情けで今一度
ワンモアチャンスだ

ハァイ　ボンジュール！
はいどうぞ
ふんふん
ぼんじゅーる…マダム？
なんだよマダムって
あたしゃまだ恋を夢見るマドモアゼルだよ

分かった
承知した
地獄車をご覧にいれよう

イッツァショータイム
お前車輪な
喜べ
今日は晴れなのに雨が見れるぞ
血の雨がな

ほら早くしゃがめ
さらばイケメン
ん、なんだって？
早口で何言ってるかわからんよ、日本語でしゃべれ

「置物の精」

包みを開けると
二つのスプーンを持った小人が入っていた
僕は床に寝転がって
その硝子の贈り物を眺めた
置物の小人は
ペアのスプーンを振り上げていた
畳半枚分のスペースを
彼に提供してみた
僕はベッドと
彼の場所で寝転がるようになった
それ以外の時間は
よく働いていたと思う
だからか、いつか、寝転がると

眠ってしまうようになった
疲れていたのかは知らないけれど
書類の詰まった鞄を彼の上に投げてしまった
鞄をベッドに放りのけると
彼は綺麗に、肩から先を失くしていた
床に転がった彼の腕はそのままで
僕は床に落ちたスプーンを一本取り上げた
接着剤をつける前に
陶器のスプーンは僕の右手の中で割れてしまった
僕は、スプーンの破片と血の付いた右手を
綺麗に洗ってから
仕事に行った
残った一本のスプーンを
間違いなく手に掴めるのは
いつだろう

「涙の輝跡」

無灯の空間
足には床の感触だけ
恐る恐ると一歩を踏み出す
視線の先に道を描くのは誰もが夢を願っているから
暗闇に瞼を閉じないのは思い出があるから
色が霞んでも、輝きはなお増す明かりが
僕を一人きりの勇者にする
恥ずかしくて泣きながら僕は宵に意気込む
月になりたい
暖かい哀しさが
僕の背中を押している

「スマイル道中」

古呆けていて胡散臭いなあ
そうオマワリさんに返された地図を右手に
君は街を進んでいる
その地図は確かに所々が切れているし
目的地に辿り着けるか心配だ
でも、そう口には出さずに、君は一人、リュックを背負って
頼もしく前を見据えるように歩いているんだね

でもたまには
地図の黄ばんだ端辺りを眺めてみようよ
いかにも、はるか昔の財宝を匂わすじゃないか
通り過ぎずに、そこらの店たちにも目を寄らせてみようよ
こっちのスーパーの軒下には、ツバメの巣がぶらさがってる

あっちの玩具屋さんの中は、おもちゃが一杯で、お客さんが入れないんじゃないか
そんなことに安心できるのが人間で
ほら、笑顔の戻った君には
窓口の駅員さんも身を乗り出して、地図を覗き込んでくれている
目を一杯に開いて電車に乗り込んだ、いまの君なら大丈夫
長い旅が打ち切られたとき
ここがゴールだったと頼もしく言ってくれると思うから

I say again「you are right」

お疲れ様
背後の今日にお別れをし、僕は部屋のドアを閉めた
大きく伸びをして首を回し、ベッドに倒れこんだ
枕に預けた頭は、まだ「おやすみ」への階段を下りる途中で、僕の目は力なくとも部屋の暗闇を所在無く漂っている
眠りの部屋の隅で、明日が顔を覗かせているのを見つけた
お前は、まだ出番じゃない。
僕は目で明日を制し、夜に押し潰す。
明日が溶け込み、こんがらがる暗闇。目を覚ます複雑さ
目を瞑れば、やりすごせる。いつも通りに睡魔を待てばいい話だ
スイッチを切ったはずの部屋に明かりが灯った。隠れたはずの明日が視界に広がる。
禍々しさは無く、酷く鮮明な明日だった
僕の部屋にさしこむ陰を鮮明に照らした小さな灯、それが君だった

いつの間に入ってきたんだろう
そんな疑問はあまり気にならなかった
それよりも、あまりに捻りの無い光で、僕は思わず笑った
あんまり無防備に灯っているものだから、守りたいと思った
頭を下げて頼み、僕は君を胸ポケットに入れた
「入り心地はどうかな」
君の光がピンクを帯びた
「ポッケに入るのは初めてなの」
ポケットから漏れる明かりが、僕のハートを赤く光らせた
熱くなった、少し照れたハートで僕は影と闘った
君の灯の影の正体なんて、分からなくても、それが光でないから立ち向かった
執拗に。無我夢中に
ところが、君の光は段々と弱っていった
それは、もっと灯るための準備のようなものだ
僕はそう自分に言い聞かせた
口数の減った彼女をポケットに、僕は眠らずに闘い続けた

そして、とうとう光は消えてしまった
僕は呟いた「なんでだ」
君は小さな声で答えた「このポケットは私に合わないの」
「入り心地なんて、一長一短だ」目の隈をのばしながら僕は言った
「そのかわり、君は守られている」
ついに、君はしゃべらなくなってしまった
光の消えた、しゃべらない君をポッケにいれている
慣れていたはずの部屋の暗闇が、僕を襲った
明日に押し潰されそうだ
闇の中、頭を抱えて、僕は叫んだ
大きな声で、精一杯の愛と悲しさを込めたつもりで
だからといって、闇は晴れず、僕は一人ぼっちだった
闇が怖くて目を閉じると、僕の心が語りかけてきた
僕は、この子が好きなんだろう？
唇を噛み締め、ゆっくりと、ポケットから君を取り出した
「いままでありがとう。僕はもう大丈夫なんだ」

君は光を瞬かせた「ありがとう」
僕は首を振った「さようなら」
君は歩き出した「ごめんなさい」僕ではない誰かを求めて「またいつか会いましょう」
頷いて答えた僕は、真っ暗な部屋に残った
目には、生まれて初めての哀しみを残して
……でも
僕は涙を拭って目を開いた
ほら、瞼には君の光が残っているよ

僕は君を肯定する
君は僕を照らしてくれて　僕のポケットに入ってくれた
僕は君を守ろうとした
僕ら二人とも、正しいんだ
僕は俯き、右手を振り上げた
今度は僕が灯りを手にする
君が見せてくれた灯の影すら照らせるように

いつか笑顔で
再会できるように。

「樫の杖に誓って」

貴方の悲しみを
恵みの豪雨に
貴方の優しさを
営みの教科書に
いつかの僕らの再会は
夜空の一等星に
そんな魔法の杖を握り続けます
鏡に映れる僕でいる限り

「夜の国へ」

昼を椅子にして杯を交わす
歩く夜は笑顔が照らして
心は広がる
朝日はたまに残酷で
僕らの結んだ手に距離を与える
昼はどうしようもなく事実で
その眩しさは僕らの顔を照らし
時に揺るぎない輝きであるはずの真実を
ビル群の陰に追いやってしまう
昼が死ねばいいのに
そう思うときがある
そうすれば僕らは心で人を区別する
事実に輪郭がなくなれば

想いがきっと
灯りにもなる

「絶対着地」

たとえばたとえば
たばこを訪ねる十分間
空気ただしい町いびき
途中の坂道、足呼吸
ふろしき空の刺繍はうかんで
とれた一点、赤しずく
枯れ木がこいつを離して
片手がポッケを出て
砂時計が首を回した、この十分
たとえばこんな着地のこと

「あらゆる日を」

曇りの日は
雲の彼方の友と肩をならべる
雨に濡れる日は
きっと陰で流した君の涙に願う
雪の降る日は
ぬくもりを教えてくれた君を愛する
晴れた日は
歩んだ足跡に浮かんだ全ての人を称えて詠う
そんな人でありたい

「一滴を雨に」

世界の全てに
雨が降り注ぐような
曲を手に入れたいんだ
知らない人でさえ足を止める
懐かしいメロディを
歌詞はいまと変わらない
ただ、君を見る僕の瞳を覆った一滴を
豪雨に変えるために
僕は探し続ける
奇跡のメロディを

「月にむらくも」

月にむらくも花に風
街の電飾が夜の川をパズルに変えて
ピースの雨に君が埋まっていく
月にむらくも花に風
雲は羊になって
風はポストマンになって
月は楚々と笑って
花の一輪は君の髪に挟まれる

「浮上落下」

何もかも
変わっていく
君の青い手触りも
僕を包んだ黄色いドームも
記憶で手帳の一行を埋めているだけ
余韻を閉じて口を笑ます明日以降
太陽の照らす好奇心よりも
夜が祝す過去が体を満たしたとき
生きることができなくなるこの世界。
なら
つぎの、あの、奇跡の刹那
常識も過去も未来もないその時間
僕は宵の闇にまみれながら

充足の余韻に心を頼んで
死を選ぼうと思う

「みんなの地下世界」

遥か胸の奥深く
決して誰の手も触れることのない
薄暗い未開の世界で
確かに造り上げられていく
感動の色に灯る家々が
お礼や後悔の音を立てて流れる水路が
夢に潜む人々が歩く路地が
僕の街は確かに出来上がっていく

でもみんなが住みに来くることはできない
僕の街の下に埋まる僕の土壌を
踏んでもらう機会はない

「目の構え」

月に兎を乗せて見せたのも
春を青く染めたのも君
君を彼女と呼んだのは僕で
その時間を過去にしたのは僕たち二人
伝う涙の心地を決めるのは
僕の面構え次第
明日を見て
過去を連れていく
青い目で
広い空に兎を描く

「湖をみる頃」

静かな心がほしい
僕を囲んでくれるみんなの波紋が
僕に伝わるように
波紋の起きない静かな心が
僕の声が
鳥を羽ばたかせないように

「墨色城」

宵空の下に出る
足速で

焦茶の列車に腰掛ける
辺りまばらで

景色が遅くなる
褪せる

線
黒宝石のレール

届けられる先は

粛然町の部屋

のんびり
ただいま

ドアを閉める
五畳
筆を進める
心が沈むように
墨色に広がる

今は
煙の家
少し寂しい夢

「今の呼吸」

空は低くなり
旅路は減っていく
でも道端に目が留まる
脇に遣る視線は深まっていく
そよいで誘う草の子供
冷えて祈る石
瞬いて恋する星たち
今しか詠えない詩を歌う
今の一つの道を歩きながら
暗黙に浮かんだ君に向かって

「ひとり散歩」

電車を選んだ君にサヨウナラ
眠らない街を歩く
僕が腕時計を外したとき、ネパールの工場について話した君
スーツが映えるその姿に、遠ざかる風船を重ねていた

摩天楼にサヨウナラ
懐かしの大学を歩く
僕の落書きに、いちいち吹き出しを書き足していた君
スターリンの革命よりも、僕はその漫画ばかりを憶えている

時計のある世界にサヨウナラ
僕は地球を歩いている
靴底のノックに応えて

僕の中で往来を始める小さな人々
愛が人を温める世界

背中を揺する冷たい気配
門の閉まった公園を歩く
街中のドアが閉め切られるそよ風、暖房が点く音
一人が寒くない世界

森が気持ちで色づくころ
つむじから漏れる、真っ白な蒸気
フキダシのように、丸まり
フーセンのように、夜の崖を昇る
三日月の縁に掛かり、雲になる

言葉にできない造形
時を讃える陰影

鞄が落ちて、手帳をペンが走る
踵を返し、カメラ店にひた走る

ほら
曖昧だった何かが、目に見えている
僕と君の証が、形になっているよ

だから
とけだした雲よ、降り出さないで
分たれた僕の欠片よ、アスファルトの下へと寝に戻らないで

泥を浴びる舗装道
体に残るのは水滴の温度ばかり
たたみかけるような雨音だけが、プラットフォームまで届く
二本の傘を持つ君のシルエットが、僕を待っていた

「夜の用事」

ポッと
用事が生まれる
ある町のアパートの一室
真っ暗な部屋に灯る豆電球みたいな
今晩に済まさなくてもいい
小さな用事
些細な、お出かけの理由
僕らは身支度を始める
パジャマに不似合いなカーディガン
レストランには連れて行けないサンダル
いこうか。うん。
地味な電灯を消す
僕らのステージが、ドアの内側から外側へ反転する

彼女が手にする財布の色は、夜道を歩くパスポート
僕が手にする部屋のカギの音は、夜道を歩く僕らの輪郭
空気が抜かれて萎んだような、冬をぐっと近づけたような、いつもの住宅街
その隙間を縫って、僕らはコンビニエンスストアを目指す
お金を少し減らして、ビニール袋を持って、部屋に帰る
ポッと
部屋の電灯を点ける
サンダルを脱いで、カーディガンを掛ける
なにも起こらなかった
夜の、いつものちょっとした用事
世界中の誰も知らない
僕らの、余白の時間

「椅子」

無名の、焦げ茶色の椅子。
その座面の張り地に、一見不吉な黒い染み。
ワインレッドの布地によぎる、中世時代の暗殺事件。
それは、僕が赤ん坊のときに口からこぼしたケチャップの染み。

僕の家の、焦げ茶色の椅子。
その脚の一本に、浅くえぐられたような、塗装の剥げた箇所。
暗黒時代、馬車で運ばれてきた縛り縄の跡。
それは、僕が中学生のときに、学校に行きたくなくて、母に蹴飛ばした傷跡。

両親が買った、焦げ茶色の椅子。
座面に残る窪み。
そこに感じる、暖炉の裏に住む小人の体温。

初恋の彼女が座り、プロポーズした彼女を座らせた温かな記憶。
いちばん座ったのは僕。仕事を辞め、４畳半の家でただただ机に向かった勲章。

僕に受け継がれた、焦げ茶色の椅子。
いまは、カフェのカウンターの隅に置いてある。
いつかの友人。老いた両親。永遠の妻。僕らの子ども。
僕の店を訪れる、大切な人が座る、特等席。
僕は、連れ添ってくれた椅子にウインクをして、心をこめて珈琲を淹れる。

「仕事ピクニック」

一緒に出勤しよう。
平和な朝の訪れを告げる、目覚ましのベル。
僕は君を、君は僕を、最初に目にする。
はじめよう。
いままでも、これからも続く、何万ページものうちの、今日。
僕がヤカンを火にかけ、君はトースターにパンをさしこむ。
僕仕込みのミルクティーと、君仕立てのサンドイッチが運ばれる。
一枚のテーブルクロスの上に、二人分の食事。食卓のタイトルは「OUR」。
僕が「DJ」の音楽にのって、君が外着のコーディネート。
部屋のスイッチをオフにして、カギを掛けて、マイホームとお別れ。
夜までの旅が始まる。束の間の道連れ。
明け方のホームで、メニューを決める。
僕が想い描く、会社の闘い。

「今日はあいつを倒す」
君が想い描く、職場の恋愛模様。
「今日はあいつが動く」
答え合わせは、夕ご飯の食卓で。
電車に乗り込む。たくさんの人、人、人、人。子ども、学生、社会人、ご隠居。
百人百色の人生の中心で、僕らは手をつなぐ。
連帯を、日が沈んだときの再会を誓う。
僕らは別々の階段へ旅立つ。折り返しのある道のりへ。
何度も何度も繰り返してきた、再会のための別れ。
その螺旋状の時間の頂きに、合作の夢を掲げて。今日もピクニックという名の出勤に臨む。
『いってきます』
2重に響くそのセリフを背に、僕らは飛び立つ。

「キミステージ」

グッキューン
僕の心が花開く
その根に水を落とした君の一瞬に、僕の全身は動作不良になる
垣間見た君の蕾を開かせようと、僕はギコギシ追いかける
バシャグイバシャグイ、水をぶっかける
君の花の姿を、世界の至るところに浮かべながら

ピッターーン
初めて重なった、お互いの時間
コーヒーカップに落ちる、君の角砂糖、俯きの白い螺旋図
君のために、何回でもオフがオンに戻る
シャキカーン
カフェに立ち上がる棚、棚、棚

整理しましょう、君の問題、シャカシャカ
右から左、上から下、過去から未来
ほら、残ったのは、たったの一つの選択。あとは君の気持ち次第。
僕はズイズイ進むから。君という真実へ

フワーン
君の姿が近づいていく、フワフワワーン
シェイクハンズ、ハグ、ピロートーク、ニヘラニヘロ
君との時間、世界は反転する
冬から春へ、夜から朝へ、雨から晴へ、黒から白へ
スリニャン、グイズボ、キラクラーン
僕の人生が両手でバランスをとっていく

ピカーン
僕は見つける
君への気持ちを伝える唯一の方法を

シコセカ、シコズン、宝物を追う勇者になる
プププププロポーズをする村娘になる
パンパカパーーン
そんなファンファーレが、５０年先まで届くことを願う
いまも僕は、君の前では何かをしたくなる、見せたくなる、見られたくなる
恋の楽器が鳴る。君のリズムに体が動く。僕らの光に踊ってしまう
ドキワク、ドキワク、フワンラブ
いつまでも、君の前だけの僕の、唯一の観客でいてほしい

「文字をつづる」

クレヨンで
こたつに
文字をつづる
意味のない線の束
書くことを知る

チョークで
道路に
文字をつづる
自分のなまえ
書く理由を知る

えんぴつで

原稿用に
文字をつづる
文章に優劣があると知る

携帯電話で
小さな画面に
文字をつづる
言葉に、受け取り手がいると知る

ボールペンで
便せんに
文字をつづる
たったひとつの気持ちすら、文章にすることは困難だと知る

目をつむって
頭の奥に

文字をつづる
人が忘れることを知る

涙で
記憶の片隅に
文字をつづる
届けられない告白があることを知る

あなたの体温で
心の真ん中に
文字をつづる
伝え、受け取り合うことが愛だと知る

いのちで
文字に
文字を連ねる

記憶の森。想い出の木々。落ち葉と、そよ風。
枝葉の間から差す、ささやかな陽射し
文字をつづって、すすむ
たったひとつの、こころにもぐり
たったひとつの、ことばをさがす

コタツのラクガキから、最期の一言までをつなぐと
きみへの、物語になる

「姿のない世界」

家のしるしを重いナップに詰めて
森の口から、姿なき終着地へむかう

天体図を描いて去った父
ランタンを置いて眠った母

腕時計の長針にしたがって
山よりも高いところをめざす

月と太陽のいない時間から、街へ滑りこむ

踏み応えのないエスカレーター
リズムのない曲がり角

声のない行き止まり

すべての輪郭をよくみて
雲をつきぬける塔をみつける

匂いのない門をくぐりぬけ
温度のない壁をよじのぼる
手と足の悲鳴をたよりに、横になる空間をみつける

ナップから、読み飽きた絵本たちを取り出し、積み上げる
即席のお家の中で、色のない夢をみる

知らない女の子が、本の家を崩す
埋もれたまま、立たない僕
首をかしげて、腰を下ろして
目をとじたまま、本をひらく彼女

頁をめくるだけの彼女に、僕は物語を暗唱する
僕が黙ると、彼女が次をめくる
僕が読むと、彼女は耳を近づける
懐かしい呪文たちが、螺旋をえがき、階段になる

目を開けない彼女は
石レンガを持ち上げる花をたぐりよせ、大気に色をつける
目を閉じない僕は
彼女の半身を僕の半身に引き寄せ、世界に温度を行きわたらせる

1人と2人の違いが、天と空と大地をつなげる

ランタンをかざし、上がるべきか下がるべきか話し合う

昼に太陽の影にくるまり、夜に月の光で服を干す

次に辿りついた場所、窓から宇宙がのぞく
天体図を手に、彼女が星を浮かべ、僕が線で繋げる
あの世とこの世をひもとく

次の日の朝、２人で窓から踏み出す
２人でがんばるのは、手を離さないこと
最初に目指した終着地へ

タケオカ詩集（２００４〜２０１２）

http://p.booklog.jp/book/62543

著者 : OfficeHasicco
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/takeokatext/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/62543

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/62543

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ